

日蓮大聖人御書全集

じゅりようほんとかいししょう

寿量品得意抄

新版
2141
ゝ
2143

じゆりようほんとかいしよう

寿量品得意抄

きようしゆしやくそん

じゆりようほん

と

たも

にぜん

しやくもん

聞

教主釈尊、寿量品を説き給うに、爾前・迹門のきき

挙 のたま

いつさいせけん

てん

にん

あしゆら

みな

をあげて云わく「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、

いま しやかむにぶつ

しやくし

みや

い

がやじよう

さ

とお

今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠

どうじよう

ざ

あのくたらさんみやくさんぼだい

え

からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえり

おも

うんぬん

と謂えり」云々。

もん

こころ

はじ

けこんぎよう

お

ほけきようあんらくぎようほん

この文の意は、初め華嚴經より終わり法華經安樂行品

いた

いつさい

ほとけ

みでし

だいぼさつとう

し

に至るまで、一切の仏の御弟子、大菩薩等の知るところの

おも

しんちゆう

思ひの心中をあげたり。

にぜん きよう ふつ とが いち ぎようふ そんな ゆえ
爾前の経に二つの失あり。一には、「行布を存するが故に、

なおいまだ権を開せず」と申して、迹門方便品の十如是の
ごん かい もう しやくもんほうべんぼん じゅうによぜ

いちねんさんぜん かいごんけんじつ にじようさぶつ ほうもん と とが に

一念三千・開権顕実・二乗作仏の法門を説かざる過なり。二

しじよう い ゆえ しやく ひら もう

には、「始成を言うが故に、なおいまだ迹を發かず」と申し

くおんじつじよう じゆりようほん と とが ふた だいほう

て、久遠実成の寿量品を説かざる過なり。この二つの大法

いちだいししようぎよう こうこつ いっさいきよう しんずい

は、一代聖教の綱骨、一切経の心髓なり。

しやくもん にじようさぶつ と しじゅうよねん ふた とがひと

迹門には、二乗作仏を説いて、四十余年の二つの失一つ

だつ じゆりようほん と

を脱したり。しかりといえども、いまだ寿量品を説かざれ

まこと いちねんさんぜん 顕 にじようさぶつ さだ

ば、実の一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず。水
みず

宿 つき

ね な くさ なみ うえ う

こと

にやどる月のごとく、根無し草の浪の上に浮かべるに異な

い

ぜんなんし

われ じつ じょうぶつ

らず。また云わく「しかるに、善男子よ、我は実に成仏し

このかた

むりようむ へんひやくせんまんおくな ゆ た こう

とううんぬん

てより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。こ

もん

こころ

けごんぎよう

はじ

しょうがく

じよう

もう

はじ

の文の心は、華嚴経の「始めて正覚を成ず」と申して始

ほとけ

成

と

たも

あごんぎよう

はじ

じようどう

めて仏になると説き給う、阿含経の「初めて成道す」、

じようみようきよう

はじ

ぶつじゆ

ぎ

だいじつきよう

はじ

じゅうろくねん

浄名経の「始め仏樹に坐す」、大集経の「始めて十六年」、

だいにちきよう

われ

むかしどうじよう

ぎ

にんのうきよう

にじゅうくねん

大日経の「我は昔道場に坐す」、仁王経の「二十九年」、

むりようぎきよう

われ

さき

どうじよう

ほけきようほうべんほん

われ

無量義経の「我は先に道場にして」、法華経方便品の「我は

はじ

どうじよう

ぎ

とう

いちごん

だいこもう

う

やぶ

もん

始め道場に坐す」等を、一言に大虚妄なりと打ち破る文な

り。

ほんもんじゆりようほん

いた

しじようしようかく

破

しきよう

か

本門寿量品に至つて始成正覚やぶるれば四教の果やぶ

しきよう

か

しきよう

いん

いん

しゆぎよう

れ、四教の果やぶれぬれば四教の因やぶれぬ。因とは修行、

でし くらい

にぜん

しやくもん

いんが

う

やぶ

ほんもん

弟子の位なり。爾前・迹門の因果を打ち破つて、本門の

じっかい

いんが

説

顯

すなわ

ほんいんほんが

ほうもん

十界の因果をときあらわす。これ則ち本因本果の法門なり。

きゆうかい

むし

ぶっかい

ぐ

ぶっかい

むし

きゆうかい

具

九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界にそなえて、

まこと

じっかいごぐ

ひやつかいせんによ

いちねんさんぜん

実の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

返

こうしてかえつてみるときは、華嚴經の台上盧舍那、

あごんぎよう

じようろく

しようしやか

ほうどう

はんにや

こんこうみようきよう

阿含經の丈六の小釈迦、方等・般若・金光明經・

あみだきよう だいにちきようとう ごんぶつとう じゆりようほん ほとけ てんげつ

阿弥陀経・大日経等の権仏等は、この寿量品の仏の天月

影 だいしよう 器 物 う たも

のしばらくかげを大小のうつわものに浮かべ給うを、

しよしゆう ちしや かくしようとう ちか じしゆう 惑 とお

諸宗の智者・学匠等は、近くは自宗にまどい、遠くは

ほけきよう じゆりようほん し すいちゆう つき じつげつ 思

法華経の寿量品を知らず、水中の月に実月のおもいをな

い と なわ

して、あるいは入って取らんとおもい、あるいは縄をつけ

繫 留 てんだいだいし しゃく い てん

てつなぎとどめんとす。これを天台大師、釈して云わく「天

げつ し ちげつ かん こころ にぜん しゃくもん

月を識らず、ただ池月のみを観ず」と。心は、爾前・迹門

しゆうじやく もの 天 つき 識 いけ つき

に執著する者は、そらの月をしらずして、ただ池の月を

望 み しゃく そうぎりつ もん

のぞみ見るがごとくなりと釈せられたり。また僧祇律の文

に「五百の猿、山より出でて、水にやどれる月をみて入つ

取

てとらんとしけるが、実には無き水月なれば、月とられず

みず お い さる し さる すいげつ つき

して水に落ち入つて猿は死にけり。猿とは、今の提婆達多・

ろくぐん びくとう 明 たま

六群比丘等なり」とあかし給えり。

いっさいきよう なか じゆりようほん てん にちがつな

一切経の中にこの寿量品ましまさずば、天に日月無く、

くに だいおう さんかい たま ひと 魂 な

国に大王なく、山海に玉なく、人にたましい無からんがごと

じゆりようほん いっさいきよう 徒 事

し。されば、寿量品なくしては一切経いたずらごととなるべ

ね な くさ 久 源 かわ とお

し。根無き草はひさしからず。みなもとなき河は遠からず。

おやな こ ひと 卑 せん じゆりようほん かんじん

親無き子は人にいやしまる。詮ずるところ、寿量品の肝心

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經こそ、

そちら

きようきようきんげん

候え。恐々謹言。

しがっじゆうしちにち

四月十七日

じっほうさんぜ

しよぶつ

はは

おわ

十方三世の諸仏の母にて御坐しまし

にちれん

日蓮

かおう

花押